

4章 南アフリカとエイズ治療薬

1 南アフリカの歴史

『最後の疫病』と『ナイス・ピープル』に描かれたケニア以上に、南アフリカのエイズ事情は深刻です。

アパルトヘイト体制がなくなりアフリカ人政権が誕生しても、大多数のアフリカ人の生活は変わらず、従来の貧困問題に加えて「昨年九月までの過去10年間で、約18000人（南ア人種関係研究所）が政治犯罪により殺害された南アでは、四月末の制憲議会選挙後、政治犯罪は減少傾向にある。しかし、凶悪犯罪も含め一般の刑事犯罪は減らず、この温床になっているのが最貧困層で、その多くが黒人だという事実は変わっていない」と報じられる犯罪率の高さが国の荒廃に拍車をかけています。

そして、未曾有のエイズ禍が追い打ちをかけているのです。NHK海外ドキュメンタリー「アフリカ21世紀」は、南アフリカのエイズの現状を次のように報告しています。

「この国を直撃しているエイズは、アパルトヘイトと深い関係があると言われます。現在、エイズ感染者は500万人、6人に1人、ここソウェトでは3人に1人が感染しています。アパルトヘイト時代、鉱山で隔離され、働かされていた単身者が、先ず、売買春によって感染し、自由になった今、パートナーに感染を広げているのです。」

番組では、月に1度、国立病院に薬をもらいにくる末期のエイズ患者が紹介されていますが、その女性患者が手にしたのはエイズ治療薬ではなく、抗生剤とビタミン剤だけでした。ウィルスの増殖を防ぐ抗HIV薬は1人当たり約100万円の費用がかかります。その年の末に、南アフリカは欧米の製薬会社と交渉してコピー薬を10分の1の価格で輸入出来るようにはなりましたが、薬の費用を政府が負担する国立病院では、感染者があまりにも多過ぎて薬代を政府が賄うことが出来なかったからです。「感染者すべてに薬を配るとすれば、年間6000億円が必要で、国家予算の3分の1を当てなければならなりません」と報告しています。

永年の苦しい獄中生活や解放闘争を経験した新政府のアフリカ人が国民の生活水準の向上を願わないとは考えられませんが、経済基盤を持たない政権に、実質的な改革を求める方が無理というものです。

番組の中で、バラグアナ病院のグレンダ・グレイ医師は政府の無策を次のように嘆いています。

「アパルトヘイト政府は、エイズに何の手も打ちませんでした。アフリカ人の病気だからと切り捨てたからです。新しいアフリカ人政府も、対策を講じない点では同罪です。感染の拡大は止まりません。これはもう、大量虐殺です」。アパルトヘ

イトは廃止されたものの、アフリカ人の安価な出稼ぎ労働者を基盤にする基本構造を変えられないまま政権を担当せざるを得なかった ANC (アフリカ民族会議) 内閣は、1997 年にコンパルソリー・ライセンス法を成立させてエイズ治療薬の確保に乗り出しますが、欧米の製薬会社の猛烈な反対にあつて計画は頓挫し、HIV 感染の拡大を防げませんでした。

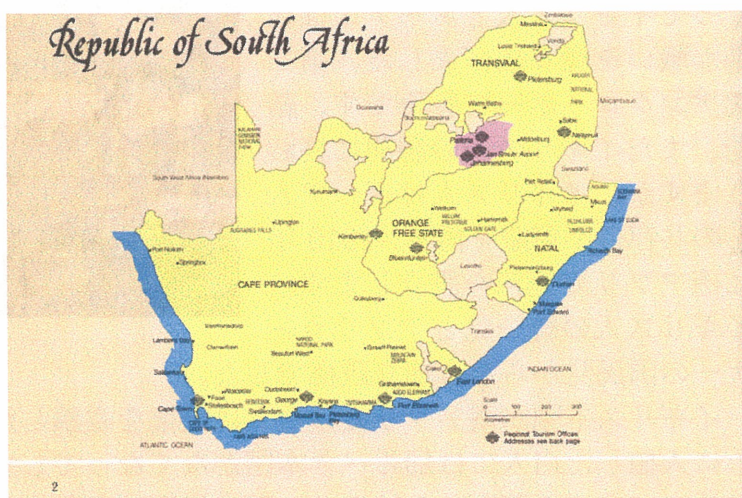
現在の南アフリカの惨状が一日でもたらされたわけではなく、以下の長い歴史の必然の結果なのです。

オランダ人

最初に南アフリカに立ち寄ったヨーロッパ人はポルトガルの航海者ですが、移り住んだのはオランダ人です。1652 年に、オランダの東インド会社のヤン・ファン・レーベック一行は、南アフリカ南端のケープに上陸しました。本国と植民地インドネシアとの間に、船に食料や水を補給できる中継基地を築くためでした。そして、現在南アフリカ第二の大都市となっているケープタウンが造られます。当初、安定した補給基地を求めた東インド会社が入植者を認めたために、宗教改革で国を追われていた新教徒がヨーロッパから続々と流れ込みました。入植者はオランダ人農民が中心で、オランダ語で農民という意味のボーアと呼ばれます。後に、「アフリカに根ざした白人」という意味のアフリカーナーを名乗るようになります。アフリカーナーは、南オランダのオランダ語を根幹とした一種の混成語アフリカーンス語を使っています。アフリカーンス語は、アパルトヘイト体制の下では、英語と並んで公用語でした。

ヨーロッパ人が移住を開始したとき、ケープ地帯には、狩猟民のサン人と牧畜民のコイコイ人が住んでいました。入植者はサン人を「ブッシュマン」、コイコイ人を「ホッテントット」と蔑んで、戦争をしかけ、コイコイ人から広大な土地と家畜を奪い、より抵抗を示したサン人の大多数を虐殺しました。

女性不足から、入植者はコイコイ人や、労働力として輸入されたマレー人たちと結婚して、今日の「ケープカラード」と呼ばれる混血のグループが生まれます。大体、18 世紀末までに、先住のコサ人などと武力衝突を繰り返しながら、入植者はケープ州東端イーストロンドン辺りにまで到達しています。しかし、ケープ地方の支配体制を完成させたのは、後から乗り込んで来るイギリス人でした。



イギリス人

市場争奪戦での競争相手国フランスのケープ進出がアジアとの貿易を脅かすことを懸念したイギリスは、1795年に大軍を送り込んでオランダ人を降伏させ、ケープを占領します。1度はケープをオランダ人に返すものの、ケープの重要性を再認識して1805年には植民地政府を樹立しました。奴隷を必要としなくなったイギリスは、1833年に奴隷を一方的に解放しますが、奴隷解放は労働力を奴隷に依存していたボーア人には大打撃でした。イギリス人との権力闘争に敗れたボーア人の富裕層は翌年、家財道具一式を牛車に乗せ、大挙して内陸部に向けて大移動を開始します。やがて内陸部を経て、翌年には、一部はインド洋岸のナタール地方に、他の集団は現在のジンバブエとの国境辺りにまで到達しています。しかし、ナタールではズールー王国と衝突し、1838年にはコモ川流域で壮絶な戦いを繰り広げました。川はボーア人に殺された3000人のズールー兵の血で真っ赤に染まったと言われます。有名なブラッド・リバーの戦いです。

戦いには勝ったもののナタール州はボーア人のものとはならず、1834年にイギリスに併合されてしまいました。

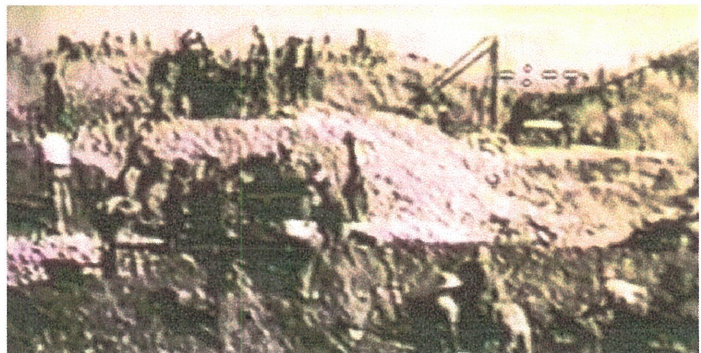
ナタール州をイギリスに併合されたボーア人は再び内陸に移動し、トランスバール州でンデベレ人と、オレンジ自由州でソト人と衝突します。

ナタール併合を果たしたイギリスは、コサ人の居住地区のシスカイとトランスカイを、ソト人のバソトランドを、ズールー人のズールーランドを、近代兵器にもの言わせて次々に併合して行きます。

1854年頃には、南アフリカは四つの州に分割され、イギリス人が海岸線の肥沃なケープ州とナタール州を領有し、ボーア人が内陸部のオレンジ自由州とトランスバール州での自治権を認められる形で落ち着きます。

しかし、1967年にダイヤモンドが、1887年には金が、それぞれボーア人の自治領内で発見されたことによって、様相は一変します。

金とダイヤモンドの採掘権をめぐるイギリス人とボーア人は壮絶な戦いを繰り広げました。第二次アングロ・ボーア戦争です。結局、またイギリス人の勝利に終わりますが、イギリス人はボーア人との共存の不可避を悟り、1910年に南アフリカ連邦を設立します。イギリス人の統一党とアフリカーナーの国民党からなる連立政権でした。



イギリス本国が南アフリカの白人に全権を委譲したのですが、その結果、南アフリカに入植した白人には帰るべき本国がなくなってしまいます。独立の騒ぎが起きたとき他のアフリカ諸国の入植者には帰る祖国がありましたが、南アフリカの入植者には

戻るべき場所がありませんでしたので、土地への執着が余計に強かったと言われてい
ます。

入植以来、イギリス人とボーア人は絶えず抗争を繰り返しますが、アフリカ人を搾
取するという点では利害が一致しました。両者が妥協点を見い出して打ち立てた連立
体制は、多数派のアフリカ人に囲まれ、常に脅威にさらされていた少数派には、必然
の結果だったでしょう。

リザーブの設定

手を組んだ白人側は、アフリカ人の安価な
労働力を基盤に体制固めをはかってゆきま
す。1913年には、原住民土地法を制定しまし
た。それまで実際に行なっていた慣習を法制
化したものに過ぎませんでした。アフリカ
人居留地「リザーブ」なるものを設定して、
人口の75%に及ぶアフリカ人を全国土の僅
か七、3%のリザーブに押し込めたのです。
カラード人口の多いケープ州は例外とされ
ましたが、白人はリザーブ内での、アフリカ人はリザーブ外での土地売買を禁止され
ました。リザーブは散在する不毛の土地で、手を組んだ白人がアフリカ人から奪い取
った大部分の土地を自分達のものだと法律で決めた訳です。



その後、ケープ州の例外条項がはずされて、リザーブが13.7%に広げられ、1936
年に原住民信託土地法と名前を変えますが、アパルトヘイト法が廃止されるまでその
法律は生き続けました。

リザーブは、後にバンツースタン、ホームランドと呼ばれますが、実体は同じで
す。

農場では引き続きアフリカ人はボーア人に扱われ使われますが、鉱山でも大規模な形
でアフリカ人労働者が搾取されました。フォアマンと呼ばれる管理者には、労働争議
の恐れのないヨーロッパ人が雇われたうえ、白人の突き上げで、政府は熟練技術を
要する職にはアフリカ人を就けませんでした。つまり、アフリカ人の賃金は極力抑え
られたのです。アフリカ人は出稼ぎ労働者として、コンパウンドと呼ばれるたこ部屋
に押し込められ、信じられない程の低賃金で働かされ続けました。

国民党政権の誕生

アフリカ人労働者の犠牲のもとに、南アフリカの工業化は進んでゆきます。ことに、
製造部門は第2次世界大戦中に飛躍的な伸びを示しました。国内産業を軍需産業に切
り替えなければならなかったイギリスやアメリカが、連合国側についた南アフリカに
も消費物資を求めたからです。より多くのアフリカ人労働者を必要とした国内産業は、

賃金の引き上げによってアフリカ人労働者を獲得しようとしたが、安価なアフリカ人労働者に依存していた白人の農場経営者や鉱山所有者の反対に遭います。その人たちは逆に安定したアフリカ人の安価な労働力を保証してくれる労働力市場を国に要求します。アフリカ人労働者にその地位を脅かされつつあった貧しい白人層いわゆるプア・ホワイトは、人種差別を前面に掲げ、白人の特権を保証することを謳う国民党に傾いてゆきます。第2次大戦でナチスドイツに傾倒した国民党の掲げる人種差別主義こそが、社会の低辺層に沈みつつある自分達を救ってくれる唯一の道だと信じたからです。1948年に行なわれた白人だけの総選挙では、白人層の六割を占めるアフリカーナーの大半の票を集めて国民党が第一党となり、アパルトヘイト政権が誕生したのです。

アパルトヘイト政策

アパルトヘイトは「分けること」という意味のアフリカーンス語で、「白人とアフリカ人が完全に分かれて生活し、それぞれの特性を発展させる」という未来図を描く国民党の政治スローガンです。しかし、実際に白人社会の繁栄がアフリカ人労働力の基盤の上に成り立っているのですから、完全な分離発展という国民党のスローガンは詭弁にしか過ぎませんでした。

アパルトヘイトは、小さなアパルトヘイト（プティ・アパルトヘイト）と大きなアパルトヘイト（グランド・アパルトヘイト）に分かれます。

プティ・アパルトヘイトは、ホテルやバスなどでの白人と白人以外の人々との差別政策で、グランド・アパルトヘイトは少数派の白人が大部分の土地を占有し、多数派のアフリカ人を散在する不毛の地に隔離することによって市民権を奪い、アフリカ人の安価な労働力を確保しようとする政策です。「白人地域」で働くアフリカ人は、「パス」の所有を義務づけられ、携帯しない場合や記載事項に不備な点が認められる場合は、罰金、懲役、強制労働を強いられるほか、人種別に割り当てられた「ホームランド」に強制的に送還されました。1965年から75年までの10年間に、年間平均50万人ものアフリカ人が逮捕されたと言います。パス法は86年7月に廃止され、かわって全国一律の新たな身分証明書が交付されました。また、労働許可証も必要とされ、仮に許可証があっても、余剰労働力として、政府の一方的な方針で強制送還される場合もありました。アメリカ映画「遠い夜明け」の中で、ケープタウン郊外のクロスローズという「不法居住地区」が強制的に撤去される凄まじいシーンがありますが、あれも余剰労働力を調整するために強行されたものです。しかし、ラジオから流れる英語放送では、「強制立ち退きは衛生上の見地から行なわれ、反対もなく住民は自主的に警察に出頭した」ということでした。

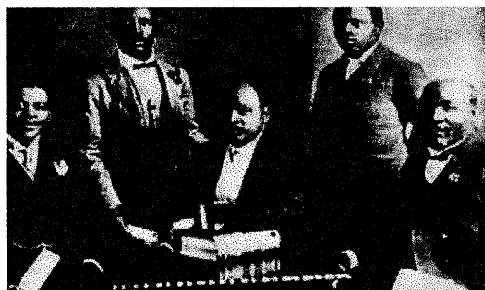
アパルトヘイト体制とは、つまり、少数の白人が大部分の土地を占有し、残りの散在する不毛の土地にアフリカ人を締め出したうえ、その労働力だけは利用して、南アフリカの豊かな富を独り占めにする国家形態だったのです。しかも、その体制を守るために、自分たちに都合のよいありとあらゆる法律を制定し、体制を維持するために

は武力行使をも辞さないというファシズム体制でもあったのです。

国民党が政権をとるまでは、現に法律はあったものの、締めつけはさほど強くなかったようで、たとえば、ケープタウン生まれの「カラード」作家アレックス・ラ・グーマは、小さい頃、アフリカ人と同じ街に住んでいたと書いています。集団地域法はあっても、厳密に施行されていなかった地域もあったということです。しかし、国民党が政権の座についてからは事態がにわかになりに厳しくなります。

アフリカ民族会議

勿論、アフリカ人はヨーロッパ人の一方的な侵略を黙って見ていたわけではありません。1882年12月には、100人のアフリカ人労働者がキンバリーで賃上げを要求してストライキを行ないました。1920年代の初めにはかなり大規模なストライキが敢行されていますが、ことごとく力で制圧されています。



1912年、アフリカ人の土地の権利の擁護と政治的な諸権利を求めて、抵抗組織南アフリカ原住民民族会議（1925年にアフリカ民族会議ANCに改名）が結成され、様々な人種グループから成る民主的で平等な統合国家実現をめざして活動を開始しました。しかし当初は、イギリス本国に代表を派遣して誓願したり、大衆に直接呼びかけるだけの消極的な活動をするだけでした。やがてはその方針に不満を持つ若い人たちが、大規模なデモやストライキなどを組織するようになって行きます。

会議運動

次々と法律がつくられ、アパルトヘイト体制が強化されるにつれて、アフリカ人の抵抗運動も次第に高まって行きます。50年代初めには、ANCを中心に、ガンジーに率いられたインドにならって「不服従運動」が展開されますが、厳しく弾圧されて運動は中止せざるを得ませんでした。しかし直後に、アフリカ人は白人、インド人、カラードと連携して会議運動を展開します。55年には、ジョハネスバーグ近郊のクリップタウンに集まり、国民会議を開き、自由憲章、フリーダム・チャーターを採択しました。解放後の、国の展望を示したもので、以下の文章で始まっています。

「自由憲章

われわれ、南アフリカの民衆は、すべてのわが国土と世界に宣言する、南アフリカは、黒人と白人を問わず、そこに住むすべての人々に属し、如何なる政府も、全国民の意志に基づかない限り、その権利を正当に主張することは出来ない、と。」

自由憲章自体は短いものでしたが、人種の平等、少数派の尊重、基本的人権の確立、アパルトヘイトの廃止、土地の再配分などをうたっており、その後の解放闘争の指針となります。

反逆裁判

会議運動の高まりに対して、政府は弾圧を強化し、1956年12月には、会議運動の指導者156名を一斉に逮捕し、全員を反逆罪で起訴しました。反逆裁判事件と呼ばれ、政府は結局反逆罪を立証し得ずに16日後には全員を保釈し、1961年3月までに全員に無罪を言い渡さざるを得ませんでした。

大変な事態であったはずですが、マンデラを含む指導者層は、一堂に会せたことに感謝して、刑務所内で勉強会を開いたと言われます。経済的に苦しく、広い国内を自由に動き回れるだけの余裕のない人が大部分だったからです。当時、ケープタウンの左翼系週刊紙「ニュー・エイジ」の記者だったラ・グーマは、ジョハネスバーグに赴いたあと「皆それぞれに大変だが不平をこぼすものは誰一人としていない」という記事で、裁判での指導者たちの息吹を伝えています。

この運動で示された多人種統合国家の実現がANCの基本路線ですが、58年に、白人の手を借りないアフリカ人だけによる闘いをスローガンに掲げるパン・アフリカニスト会議(PAC)が、ロバート・ソブクウェに率いられて、ANCと袂を分かちます。ソブクウェが人間的に大きな人物でなかったら、それほど大きな分裂騒ぎにはならなかったのですが、実際にはたくさんの人が理想主義的なソブクウェに惹かれてANCを去り、PACに加わりました。

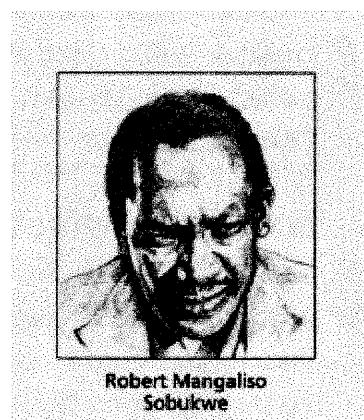
解放闘争におけるこのアフリカ人側の分裂は、体制側には願ってもない事態でしたが、南アフリカの歴史にとっては大きな、悲しい分岐点となりました。ANCを率いていたマンデラとPACを率いて袂をわかったソブクウェとの歩み寄りが実現していたら、南アフリカの歴史も、アフリカ全体の歴史も、人類全体の歴史も大きく変わっていたかも知れません。

ロバート・マンガリソ・ソブクウェ

後に一番の理解者となるベンジャミン・ポグルンドの伝記『ロバート・ソブクウェとアパルトヘイト』をもとに、歴史の流れを左右するほどの人物ロバート・マンガリソ・ソブクウェをみてゆきたいと思います。

ソブクウェは、1924年に、ケープ州南東部の貧しい町に生まれて、ミッション系の高校を出た後、アフリカ人用の南アフリカ原住民大学フォートヘア・カレッジに進んでいます。

当初政治への関心を見せませんでしたでしたが、フォートヘ



アで「原住民」の優等生から、体制に立ち向かうアフリカ人に生まれ変わります。「原住民行政」学を担当していたセスウル・ントウロコの感化を受けて、アフリカ諸国や広く世界の情勢についても考えるようになり、それまでの教育が如何に白人中心であったかを知り、愕然とします。白人でない人たちが、人種隔離制度によって劣等の意識を植え付けられたうえ、惨状に黙従することに慣らされてしまっている現状を、強く意識し始めました。

43年には、ANC内に青年同盟が結成され、ソブクウェも、フォートヘア支部で、中心的な役割を果たします。高校の教員をしたあと、54年に看護婦をしていたヴェロニカと結婚し、ヴィットヴァータースランド大学の語学助手として、ジョハネスバーグのソウェトに移り住みました。

4人の子供を設け楽しい家庭生活や大学での教員生活を送りますが、長くは続きませんでした。まわりの現実と時の情勢が厳しすぎたからです。定期的に自宅で会合がもたれ、ソブクウェのもとに、次第に人が集まるようになりました。ポグルンドが最初にソブクウェと出会ったのは、そんな時期で、如何にも学者風で、気弱なというのが第一印象でしたが、58年の半ば頃には「気高く、明晰で、思慮深く、極めてすぐれた感性の持ち主で、接すれば接するほど好きになって、感化を受けています……何とも偉大な男です」という印象に変わっていました。

48年からの10年間で、国民党政権は体制を固め、58年4月の選挙では3分の2の議席を確保します。58年に首相になったファブールトは、政府のブレーンに「分離発展」の政策を研究させ、ミニ独立国家を作ってアフリカ人を外国人に仕立てるバンツースタン政策の基礎固めを始めています。

こうした厳しい状況のなかで、ANCが分裂します。特権を享受する白人や共産社会を目指すコミュニストとも共闘する指導層と、アフリカ人だけの闘いを主張するアフリカニストの路線の違いが58年末の年次総会で決定的となり、翌年、パン・アフリカニスト会議(PAC)が結成されます。ソブクウェが議長に選ばれ、次の5つの目標を掲げます。

- (1) アフリカ・ナショナリズムに基づいた国民戦線に、アフリカ人を統合、集結させること、
- (2) 白人支配を打倒するため、また、アフリカ人のための自己決断の権利を履行、保持するために闘うこと、
- (3) 各人の物質的、精神的な利益を優先するアフリカ社会民主主義を打ちたて、維持するために働き、尽力すること、
- (4) アフリカ人の教育的、文化的、かつ経済的発展を促進すること、
- (5) アフリカ人同士の連帯を強めることによって、南アフリカ同盟とパン・アフリカニズムの概念を伝え、広めること。

ソブクウェは「日頃、白人の侮蔑や屈辱に黙って従うことが、アフリカ人の劣等性を認めることになるのだから、先ずアフリカ人自身が人間としての誇りを取り戻した

上で、政治的、経済的、社会的な地位（ステイタス）の改善を求めて広範なキャンペーンを展開する」という声明を発表し、不満が多かったパスの問題を取り上げました。労働者がパスを置いたまま家を出て、仕事に行く途中、最寄りの警察署に出頭して、自らパス不所持の罪で逮捕されるという戦略です。その方法が成功すれば、警察署や裁判所や留置場に人があふれて政府は混乱し、労働者がいなくて雇用者が困るという二重の効果があらわれると、ソブクウェは考えたのです。

共闘を呼びかけたANCに時期尚早と断られた為に、60年3月21日に単独で行動を始めます。

当日、ソブクウェは会員数名とソウエトの中央警察署に出頭して、パスを携帯していないので逮捕してほしいと申し出ていますが、11時頃まで外で待つように指示されます。外で待っている間に、事態は思わぬ展開を見せました。何箇所かのアフリカ人居住区で、警察の発砲によって死者も出ているというニュースが伝えられたのです。ポグルンドは、居住区の1つシャープヴィルに駆けつけ、大量虐殺を目のあたりにしました。死者68名、負傷者186名。350人の警官が、20000人近いアフリカ人に対して無差別の銃撃を行なったのです。警察の放った705発の銃弾によって歴史を大きく塗り替えられた南アフリカは、もはや元の状態には戻りませんでした。

シャープヴィルだけでなく、各地でキャンペーンが展開されました。特に、ケープタウンとその近郊では、ソブクウェに深く感化を受けた大学生フィリップ・コウサーナの指揮のもとに、活発な活動が繰り広げられ、事態が収まるまでケープタウンではパス法を一時停止する、という約束を警察から取り付けています。25日に、必要ならPACとANCの活動を禁止させる法律を議会に提出するという声明が出され、翌26日には、パス法の一時的停止が発表されました。

PACの勝利は明らかでしたが、指導者の逮捕による組織の弱体化は隠せませんでした。悪いことに、ANCがキャンペーンの主導権を握ったことで、組織は更に混乱しました。パス法の一時的停止措置などの流れに乗じて、ANCがアフリカ人にパスを焼き捨てるように呼びかけたからです。当初はキャンペーンに反対し、非難までしておきながら、パス法の一時的停止措置などの成果を見てキャンペーンに便乗するANCの日和見主義的なやり方をソブクウェは非難しますが、大衆の勢いと時の流れの早さは、ソブクウェの読みをはるかに超えていました。

28日の在宅ストライキは史上最大のものとなりました。大都市では、アフリカ人労働者の九十%近くが、また小さな町でも、相当数の労働者がストに参加して、仕事に行きませんでした。同日、政府はPACとANCの活動を禁止させる議案を国会に提出し、30日には裁判なしに人々を拘禁し、集会を禁止できる権限を警察に認める非常事態宣言を出して、事態の收拾に乗り出しました。

4月8日には、PACとANCを非合法化する法律が発令されましたが、既に両組織とも壊滅状態で、4月10日にはパス法が復活しています。PACの呼びかけに応じて立ち上がったアフリカ人勢力は、警察や軍隊や議会などを駆使した少数派白人に、完全に封じこめられてしまったのです。

ソブクウェはマーシャル・スクウェアに二晩拘留されたあと、法廷に連れ出され刑

事法修正令が適用されました。同修正令は ANC の不服従運動をつぶす目的で 52 年に改悪されたもので、500 ポンド以下の罰金もしくは 5 年以下の懲役が課せられる重刑でした。ソブクウェは、白人が作った法律のもとで、アフリカ人が公正な裁判を受けられるとは思えないので、抗弁はしないと述べました。5 月 4 日には、3 年の禁固刑で、フォート刑務所に送られました。ソブクウェは「不正な法律が公正に適用されることはあり得ないのです。自分たちが起こした行動の結果と対峙するのを恐れたいはしません」と、判決前に語っています。

ソブクウェが法廷で闘っている間、政府は「秩序の回復」をはかりました。コミュニストやリベラルを含む 1800 人が逮捕されてフォート刑務所に送りこまれ、5 月初めまでに、アフリカ人の逮捕者は、18001 人にのぼりました

3 年の刑期を終えて、63 年に出獄するはずのソブクウェの運命は、獄中にある間に大きく変わっていました。その最大の要因は、ポコと呼ばれる集団のテロ活動でした。非暴力を貫いた反パス法キャンペーンを力で押さえこまれて遣り場を失なった PAC の若者たちの憎しみが、白人に向けられたのです。2 年の刑期を終えてバソトランドに逃れたレバロが指揮を取り始めた八月には、その勢いを強め、翌年 2 月には、トランスカイで、5 人の白人を惨殺しました。既に ANC が武力闘争を開始していたから、白人社会に与えた衝撃は尚更でした。

4 月に蜂起する計画は未遂に終わり、3000 人以上が逮捕されてポコは消滅しましたが、レバロの無謀な行為は、体制側にソブクウェの拘禁を延長する口実を与えました。時の首相フォルターは、刑期終了後も法務大臣が認めれば、拘禁を再延長できる「ソブクウェ法」を考え出し、議会に提案し、5 月 1 日には効力を発揮しました。「ソブクウェ法」は、64 年 6 月 30 日が期限となっただけでしたが、国会の承認があれば 1 年毎に延長が可能という法律で、ソブクウェはロベン島に送られました

6 月には、65 年 6 月 30 日まで「ソブクウェ法」が延長され、次回からの期間延長には議会の審議は必要なく、法務大臣の命令さえあればよいという改悪がなされていました。政府の強硬な対応によってアフリカ人側の状況は更に厳しくなっていました。

65 年 2 月早々に、再延長され、以後、68 年まで延長措置が続きます。

68 年にはキンバリーに移され、5 年間の自宅拘禁を言い渡されています。長い間の孤独拘禁によって精神障害の兆候が見え出したソブクウェをこれ以上ロベン島に監禁して国際非難を浴びるよりは、自宅拘禁の方が得策だと政府は考えたのでしょう。

ダイヤモンドの町キンバリーには白人とカラードが 36000 人、アジア人 1000 人、アフリカ人 66000 人が住んでいました。ツワナ系のアフリカ人が主流で、コサ出身のソブクウェには初めての環境でした。ソブクウェは、鉄製のベッドとわずかな家具しか準備されていないトタン屋根の家を割り当てられ、そこでの 5 年間の自宅拘禁を言い渡されました。キンバリー市内からは出てはならない、午後 6 時から朝の 6 時までには自宅内に留まることなど、様々な制限を受けています。それでも、世間から全く隔離されたロベン島の生活に較べれば、大きな変化でした。

77 年 6 月になって、ソブクウェは体調の不調を訴えました。熱が高く、ひどい咳

が取れなかったからです。その時点での診断は、細菌感染によって心臓の筋肉が弱り病状は思わしくないものの、治療次第では良くなるだろうということでしたが、九月には肺癌に侵されていることが判明します。政府は、ブルームフォンテンでの手術を指示しましたが、ソブクウェはその命令をかたくなに拒否しました。政府が、どこで手術を受けてもよいと発表したのは9月9日、ソブクウェがケープタウンで肺除去の手術を受けたのは、9月14日でした。その後、放射線治療を受けるために、キンバリーとケープタウンを何度も往復しましたが、78年2月には危篤状態に陥り、78年2月27日、54歳の若さで、二度と還らぬ人となりました。

白人政権は、政府を転覆させる可能性の最も高かった人物を合法的に歴史の闇に葬り去ったのです。

シャープヴィルの虐殺

PAC が始め、後に ANC が便乗して繰り広げたキャンペーン活動はシャープヴィルの虐殺として歴史に名をとどめています。その事件はショッキングな「虐殺事件」としてただちに世界中に伝えられ、非難の声が高まりました。そして、非難の声は制裁へと動きます。政府は非常事態宣言を発令して弾圧に乗り出す一方、経済制裁に動き出した各国に使節を送り友好関係の継続を訴えました。

この時、日本政府は、国際世論に反して国交の再開と大使館の新設を約束し、翌年の一月には通商条約を結びました。白人政府はこれに対して4月の議会で、日本人を居住地に関する限り白人なみに扱うことを表明します。1920年、30年代に既に使われていた名誉白人の称号は、貿易関係が親密になるにつれて実を伴う不名誉な称号となっていくます。



60年4月に、ANC と PAC が禁止されませんが、アフリカ人の抵抗は根強く、フルールト首相暗殺未遂事件などもあって、弾圧はさらに強化されていきます。

そんな中、61年5月31日、政府は白人の一方的意志により、英連邦を離脱、共和国を宣言します。地下解放戦線はマンデラを総書記にしてゼネストで対抗しますが、力で押し切られてしまいます。白人のこうした異常なまでの弾圧に、ANC は五十年近く続けてきた非暴力の道を捨てて、武力闘争部門「民族の槍」を創設し、61年12月、遂に武力闘争を開始します。

リボニアの裁判

ネルソン・マンデラは、1918年にテンブ人の首長の長男としてトランスカイに生

まれました。52年には、オリバー・タンボと一緒にジョハネスバーグで弁護士事務所を開業し、解放運動の只中にいました。ANCが禁止された後も、果敢に地下活動を続けますが、62年8月に逮捕され、5年間の禁固刑を言い渡されてロベン島に送り込まれてしまいます。裁判では、白人が一方的に決めた法律に従う義務は自分になく、刑期終了後も不正がなくなるまで戦うことを言明します。

激しくなる一方の破壊活動の脅威から、政府は62年6月に一般法修正令、俗にいう破壊活動法を成立させていました。その法律は常識を越えて市民さえ容易に巻き込む厳しいものでした。

しかし、破壊活動法を強行し、マンデラを逮捕・監禁しても、破壊活動の火は鎮まりませんでした。追い詰められた政府は、63年5月にさらに法を改悪、再修正して、名目上一期を90日として、破壊活動に少しでも係わりがあると思える個人を、逮捕状・裁判なしに拘禁できる「90日無裁判拘禁法」を成立させ、指導者層を追い込んでいきます。拘禁された者は、1日に23時間半、孤独拘禁され、様々な精神的・肉体的拷問を受けました。

63年7月、ジョハネスバーグ近郊にあるリボニアにあったANCの武力闘争部門「民族の槍」の司令部が急襲され指導者が大量に逮捕されます。そして、追訴されたマンデラとともに裁判にかけられ、「リボニアの裁判」が始まります。

マンデラは育てられた心豊かなアフリカ人の伝統社会と、貧しいアフリカ人の窮状と、なぜ非暴力を捨てて破壊活動という形で武力闘争を始めなければならなかったのかを語ります。そして、五時間に渡る陳述を次の格調高い一節で締め括りました。



「……今まで述べてきましたように、これまでの人生をすべてアフリカ人の闘いのために捧げてきました。白人支配とずっと闘ってきましたし、黒人支配とも闘ってきました。みんなが協調して、平等に機会を与えられて共存する民主的で自由な社会を理想としてきました。それは私がそのために生き、成し遂げたいと願う理想です。もし必要なら、その理想のために死ぬ覚悟は出来ています」。

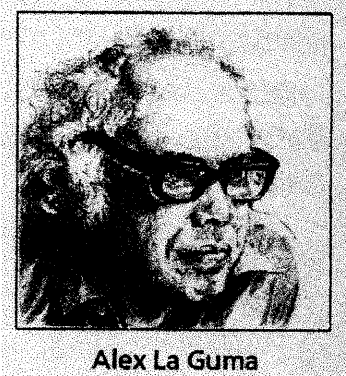
世論を懸念した政府は、極刑は下さずに八名全員に終身刑を言い渡し、マンデラを含む七名をそのままロベン島に送り込みました。解放運動の指導者は、国外逃亡を強いられるか、拘禁されるか、抹殺されるかの壊滅状態に追い込まれ、大衆は指導者を失って、南アフリカは暗黒の時代に突入していきます。

その頃、日本では東京オリンピックが開かれ、高度経済成長の時代が始まろうとしていました。

アレックス・ラ・グーマ

ソブクウェやマンデラと同様に、解放闘争で指導者として闘いながら、作家としても優れた作品を残した人たちがいます。ラ・グーマもその一人です。

ラ・グーマは1925年にケープタウンに生まれました。父親が解放運動の草分けの一人でしたから、早くから政治意識に目覚め、高校を中退したあと、46年にはストライキを先導して会社を解雇されました。48年には共産党に入党し、55年には南アフリカ・カラード人民機構の議長に選ばれています。同じ年にケープカラード社会での人望と文才を認められて、反政府路線の週刊紙「ニュー・エイジ」に記者として採用されました。57年からコラム欄「わが街の奥で」を書き始め、62年に破壊活動法によって記者活動を断念させられるまで健筆を揮いました。



56年には他155名とともに反逆罪の嫌疑で逮捕されています。以来、60年、61年、63年、66年にも逮捕・拘禁されていますが、それはラ・グーマが白人政府に脅威を与える存在だったからです。66年に釈放され、5五年間の自宅拘禁を強いられたラ・グーマは、家族と共にロンドン亡命の道を選び、祖国を離れます。

亡命してからもラ・グーマは、積極的に反アパルトヘイト運動を続け、70年にANCロンドン地区議長になり、78年にはカリブ代表としてキューバに赴任しました。様々な国の作家と連帯しながら精力的な創作活動を展開し、70年にはアジア・アフリカ作家会議からロータス賞を授与され、79年には議長に選出されています。81年には来日して会議などに出席し「日本をどう変えるかはあなたがたの問題ですが、原則的なことは、日本の物資的豊かさは第三世界の搾取の上に成り立っていることです」と語りました。

しかし、85年に心臓発作のため、60歳の若さで2度と還らぬ人となりました。

ラ・グーマは2つの思いから作品を書きました。1つは、世界の人々に南アフリカの実状を知って欲しかったからです。美しい南アフリカを強調する政府の観光宣伝とは裏腹に、人々は現実にアパルトヘイト体制の中で苦しみを強いられていました。

もう1つは、歴史を記録してアパルトヘイトが廃止されたあとも厳しい時代があったことを後の世の人に伝えたかったからです。

『夜の彷徨』では、ケープタウンのカラード居住地区の夜を彷徨いながら、無為な時を過ごす若者たちが容易く犯罪の世界に巻き込まれてゆく姿を描いています。当時、警察の厳しい監視下にありましたが、幸いなことに60年に再逮捕されたとき『夜の彷徨』の草稿はほぼ完成されていました。ラ・グーマは原稿を一年間郵便局に寝かせておくようにブランシ夫人に指示してから拘置所に赴いています。一年後、郵便局から首尾よく引き出された原稿は、ブランシ夫人の手から、私用で南アフリカを訪れていたムバリ出版社のドイツ人作家ウーリ・バイアーの手に渡り、国外に持ち出されました。ラ・グーマの機転、ブランシ夫人の助力、ウーリ・バイアーの好意、どれひとつが欠けていても、『夜の彷徨』の出版はかなわなかったでしょう。

第2作『まして束ねし縄なれば』は東ベルリンのセブン・シーズ社からの要請に応えたもので、執筆の一部や出版の折衝、契約なども刑務所内で行なわれていますので、文字通り鉄格子の中から世に送り出された作品です。

田舎から仕事を求めて出てきた人たちが住み着いたケープタウン郊外のスラムが舞台で、住人は、ナイロンや鉄くずや段ボールを集めて小屋を建て、雨露をしのいでいます。

心優しい主人公チャーリーを軸に、家族や恋人や親戚との日常の出来事、葬式や出産、警察の手入れなどを雨と絡ませながら、色彩語、擬声語などを駆使して、アパートヘイト体制の下で呻吟しながらも力を合わせて何とか生き永らえている人々の姿を、ラ・グーマは描きました。

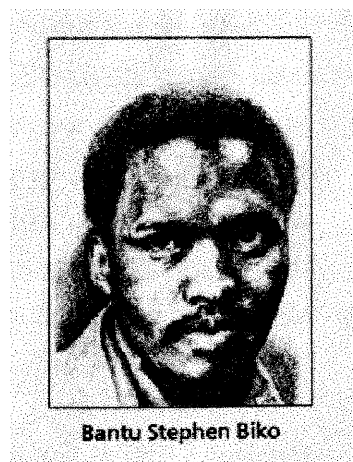
伝記『アレックス・ラ・グーマ』を書いた南アフリカの学者セスウル・エイブラハムズさんは「あの人は絶えずものごとのいい面をみていました。いつも山の向う側をみつめていました。だから、たとえ人々がよくないことをしても、楽観的な見方で人が許せたのです」と評しています。南アフリカ解放の日を見ることはありませんでしたが、ラ・グーマの思いは、作品を通して生き続けています。

バンツー・スティーヴン・ビコ

人々が指導者を失なった暗黒の時代に、次の新しい世代が生まれます。バンツー・スティーヴン・ビコに率いられる学生たちを中心にした世代です。

ビコは1946年にケープ州東部のキングウィリアムズタウンで生まれました。ナタール大学医学部の学生時代に解放運動の指導者となり、のちに、白人の手を借りないアフリカ人だけによる「ブラック・コミュニティ・プログラム」を推進していきます。

ビコはまず何よりも、自己意識の変革を訴えます。白人のもとに働きに出るために両親が不在のまま、惨めなスラム街で幼少時代を過ごす子どもたちが、やがて白人居住区に出るようになると、いやでも白人社会との格差を思い知らされます。白人の教育を受け、白人の価値観に飼い慣らされ続けるなかで、知らず知らずのうちに肌の色に起因すると思われる劣等感を抱くようになってゆきます。したがって、アフリカ人は、人間性を取り戻すために、白人とは係わりなく、まず自分自身の価値体系を確立し、自分の生き方を自分で決める必要がある……つまり、何よりも自己意識の変革の尊さを説いたわけです。そして、「プログラム」に従って、74年にザネンピロ・コミュニティ・ヘルス・クリニックを創設して、自ら実践をしてみせます。すべてのものが白人の価値体系下にあった当時の状況の中で、アフリカ人自身の手によって、白人に影響されることのない自立の方向性を具体化し、実践に移し得たのは画期的なことでした。法廷においても、理路整然とアフリカ人自身の自己変革の必要性を説きました。



76年の裁判では、黒人・白人の武装した警官の立ち並ぶなかで「警察当局のために働いているアフリカ人をどう思うか」と尋ねられた時「その人たちは裏切り者です」と厳然と言いました。

別の裁判では、黒人意識運動の概念について質問されて、次のように述べています。

「基本的に『黒人意識』が言っているのは黒人とその社会についてであり、黒人が国内で2つの力に屈していると、私は考えています。まず何よりも黒人は、制度化された政治機構や、何かをしようとすることを制限する様々な法律や、苛酷な労働条件、安い賃金、非常に厳しい生活条件、貧しい教育などの外的な世界に苦しめられています。すべて、黒人には外因的なものです。2番目に、これが最も重要であると考えますが、黒人は心のなかに、自分自身である状態の疎外感を抱いてしまって、自らを否定しています。明らかに、ホワイトという意味をすべて善と結びつける、言い換えれば、黒人は善をホワイトと関連させ、善をホワイトと同一視するからです。すべて生活から生まれたもので、子供の頃から培われたものです。」

その存在があまりにも大きくなり過ぎたために官憲の手によって獄中で葬り去られてしまいます。77年9月12日のことでした。

そのビコの存在は、社会や親たちに希望を見い出せなくなっていた若者たちを立ち上がらせる大きな力となりました。

ソウェト蜂起

70年代のアフリカ人の抵抗運動は73年の労働者の広範囲にわたるストライキで始まりました。ストライキの波はナミビアの鉱山ストライキやダーバンでのゼネストへと波及して翌年まで続きます。厳しい弾圧にもかかわらず、ストライキの参加者は2年間で20万人、数も246に達しました。

75年のモザンビークとアンゴラの独立やアンゴラ内戦に介入した南アフリカ正規軍の敗戦・撤退の知らせは国内のアフリカ人たちを勇気づけます。

76年6月、自らの意志で、自らが決定して、ソウェトの高校生たちが立ち上がります。アフリカーンス語の強制的な導入などを拒否して、高校生がデモ行進を始めたのです。希望を挫かれてもぐり酒屋に逃避する親たちを叱咤して、警官隊と対峙し、銃弾に立ち向かっていったのです。警官隊の発砲により多数の死傷者を見ますが、抗議と連帯のデモは各地のアフリカ人居住地区に広がります。この一連の事件はソウェト蜂起と呼ばれ、「ソウェト以後」という言葉で表現される新しい世代が解放運動の流れを大きく変えていくこととなります。

575人の死者、数千人の負傷者と公式発表されましたが、実際の犠牲者はそれ以上であったと言われます。

セスウル・エイブラハムズ

87年8月に亡命先のカナダで出会った南アフリカの学者セスウル・エイブラハムズさんは、銃弾に立ち向かって殉教した若者に次の詩を捧げました。

「ソウェト殉教者たちに寄せる詩」

わたしは一枚の写真を見た
一万二千マイル離れた国の、ある
新聞に
わたしの同胞の血が
その憎しみの手に
ふたたび流れ落ちるのを

ひとりの勇敢な少年が
その少年は
わずか八歳でしかなかったが
避けようのない、見るからに恐ろしい
死の銃弾にむかった

少年はまっ先に死んでいった
一番あとから行動を始めたのに
少年の罪は
憎しみにただ抗議しただけであった

どこで確かめればよいのか
おぞましい地獄絵から
そんなにも遠く離れて
どのように語ればよいのか
恐怖の
重い残忍な手を
決して感じたことのない
隣人たちに
革命の心に深く沈む
この苦しみ
この憤りを

私がエイブラハムズさんにお会いしたのは、1987年の米国での会議に向けてラ・グーマの資料を探していた頃です。ライトのシンポジウム(1985)の際に立ち寄ったミシシッピの本屋のリチャードさんから届いた『アレックス・ラ・グーマ』を読んで、その本格的な作品論・伝記を書いた人に会いたいと思いました。住所を調べて「お訪

ねしたいのですが」と手紙を書きましたら、「北アメリカに着いたら電話して下さい」という返事が届きました。

南アフリカの 아프리카人にとって日本は当時アメリカと並んで白人政権への投資高を競う最悪の貿易パートナーで、シャープヴィルの虐殺以来の裏切りの国のはずです。にもかかわらず、そんな国からやってきた突然の訪問者を受け入れて丸々3日間、温かくもてなして下さいました。長時間のインタビューにも応じて下さり、ラ・グーマの作品の草稿のコピーなども分けて下さいました。7月に移ったばかりのオンタリオ州のブロック大学で、「私の国が解放されたとき、この学校管理の仕事に役立てたいんです」と言いながら、学生1万人、教授陣300人を擁する人間学部の学部長として忙しい日々を送っておられました。



エイブラハムズさんは、1940年にジョハネスバーグ近郊のブルドロープに生まれています。父親がインド出身で、母親がユダヤ人の父とズールー人の母を持つ家庭に生まれ、政府に「カラード」と分類分けされました。貧しい家庭でしたが、教育熱心な母親のお陰で、高校を出てヴィットヴァータースラント大学に進んでいます。99%が白人のその大学ではアフリカ人は授業に出ることと図書館を利用することしか許されませんでしたので、1年で退学し、その後現在のレソトの大学で学士号を取って再び南アフリカに戻り、7ヶ月間無免許で高校の教壇に立ちました。

インタビューのなかで少年時代のことを次のように語ってくれました。

「私が拘置所に初めて行ったのは12歳のときですよ。サッカーの競技場のことで反対したんです。アフリカ人の子供たちと白人の子供たちの競技場があって、黒人の方は砂利だらけで、白人の方は芝生でした。すり傷はできるし、ケガはするし、だからみんなを白人用の芝生の所まで連れて行ったんです。そうしたらみんな逮捕されました。それから、人々があらゆる種類の悪法に反対するのを助けながら自分の地域で大いに活動しました。だから、3度刑務所に入れられたんです。」

ANC（アフリカ民族会議）の会員になったのは16歳の時です。61年5月共和国宣言に抗議して行なわれた在宅ストを指導して裁判なしに4ヶ月間拘禁された後、63年に、ANCの車で国境を越え、スワジランド、タンザニアを経てカナダに亡命しています。エイブラハムズさんが亡命したため、母親が逮捕され、兄が教職を奪われたことをのちに口づてに聞かされたということです。

ラ・グーマより15歳年下のエイブラハムズさんも、12歳で拘禁され、ラ・グーマより3年も前に亡命を余儀なくされていたのです。

カナダでは市民権を得て、修士号、博士号を取ったあと、大学の教壇に立ちました。カナダにはアフリカ文学のわかる人がいなかったため、英国詩人ウィリアム・ブレイ

クで博士論文を書いたそうです。

そんなエイブラハムズさんがラ・グーマと出会ったのは、客員教授としてタンザニアのダル・エス・サラーム大学に招かれた76年のことです。当時、ラ・グーマは客員作家として同大学に滞在していました。2年後、エイブラハムズさんはロンドンでラ・グーマに再会し、ラ・グーマに関する本を書くことを決意したと言います。80年あたりから本格的にその作業に取りかかり、82年には、ラ・グーマの出版や原稿の管理を家族から頼まれ、更に伝記家としての仕事も引き受けました。私が読んだ『アレックス・ラ・グーマ』は、こうして生まれたのです。

「わが子を見つめる父親のように」「いつも山の向う側をみつめていた」ラ・グーマを偲びながら、エイブラハムズさんが語ります。

「アレックスは、カレード社会の人々の物語を語る自分自身を確立することに努めました。その人たちが無視され、ないがしろにされ続けて来たと感じていたからです。

ラ・グーマはまた、自分たちが何らかの価値を備え、断じてつまらない存在ではないこと、そして自分たちには世の中で役に立つ何かがあるのだという自信や誇りを持たせることが出来たらとも望んでいました。だから、あの人の物語をみれば、その物語はとても愛情に溢れているのに気づくでしょう。つまり、人はそれぞれに自分の問題を抱えてはいても、あの人はいつも誰に対しても暖かいということなんです。腹を立て『仕方がないな、この子供たちは……』と言いながらもなお暖かい目で子供たちをみつめる父親のように、その人たちを理解しているのです。それらの本を読めば、あの人が、記録を収集する歴史家として、また、何をすべきかを人に教える教師として自分自身をみなしているなど感じるはず。それから、もちろん、アレックスはとても楽観的な人で、時には逮捕、拘留され、自宅拘禁される目に遭っても、いつも大変楽観的な態度を持ち続けましたよ。あの人は絶えずものごとのいい面をみていました。いつも山の向う側をみつめていました。だから、たとえ人々がよくないことをしても、楽観的な見方で人が許せたのです……。」

エイブラハムズさんは、若い世代に希望を託していました。

「若い世代は変わると思います。あの子たちはたいへん違っていますよ。男とか女とかではなく、人間としてお互いを尊敬し合っています。だから、あの子たちが完全な変革をもたらすんだと私は考えているんです。南アフリカで現在起こっている事態はきわめて実践的で、若い人たちは自分たちの両親のやってきたことをしようとはしません。あの子たちは姿勢が全く違いますよ。南アフリカにはとてもいいことだと思うんです。ですから、ANCには、政府を変える前に人間性をまず変えろ、といつも言ってるんですよ。言い換えれば、ANCのトップに女性の数が充分でないと感じているということなんです。ANCのために働いている女性がこんなにたくさんいるのに、女性は高い地位に就いていない。だから、女性をもっと正當に扱え、

といつも言っているのです。ANCの大半は、もちろんアフリカ人で、ズールーやコサなどいろんな共同体から来ています。伝統では、男は自己中心的に育てられてきました。今まで男が女性と権力を分かち合うことなど決してなかった。男が常に主人で、すべての穢ない仕事は女性がしなければならなかった。ANCの多くは、特にタンボやマンデラのような古い世代の人たちは、愛国主義中心の考え方の中で育てられた。あの人たちが、革命は単に政治ばかりではないということを理解するには暫く時間がかかると思います。それはあなたが日々行なうことでもあり、子供や妻を扱うやり方でもあるのです。つまり、人の生き方なのですよ……私はANCの会員ですが、来るべき政府にだけ関心があるわけではありません。それが一番重要だというのではないのです。大切なのは、私たちが新しい社会を、新しい生活のやり方をつくり上げることなのです。お互いが尊敬し合い、お互いがいたわり合い、感性を大切にす、そしておまえは男だ、あいつは女だ、などと言わずに、相手を理解する、そんな社会なのです。私にはそれが重要だと思えてならないのです。今の若い人たちは酒を飲みません、人々が闘い方を知らないのは酒のせいだと言うんです。だから、あの子たちは酒を飲むのを嫌います。デモをやる時は、まずシビーン（もぐり居酒屋）に行き、酒を投げ棄て、そこに居る人たちを叩き出してしまいます。襲うのは政府ばかりではなく、自分たちの同胞もやるんです。あんなものは健康によくないんだ、とあの子たちは言います。人々は給料をもらったらまっすぐシビーンに行き、家には帰らない。帰る頃には妻や子供のための、ミルクやパンや着物や本の金がすっかりなくなってしまうている。亡命しているたくさんの南アフリカ人は、多くは政治的な理由でイギリスに行っていますが、あの人たちは集まっては酒を飲む。かつてイギリスに行ったとき、この人たちは何て飲むんだ、と驚いたのを覚えています……。」

翌年、私はブロック大学で開かれたラ・グーマとベシー・ヘッドの記念大会に招かれ、50人ほどの国内外の南アフリカの人の前で話をする機会を与えられ、亡命先のロンドンから駆けつけたラ・グーマのブランシ夫人ともお会いしました。

エイブラハムズさんはアフリカ人政権誕生後、マンデラの公開テレビインタビューを受けて西ケープタウン大学の学長になり、今は米国セントルイスのミズーリ大学セントルイス校の招聘教授として活躍中です。

ラ・グーマやエイブラハムズさんのような人たちが国外で闘っている間、南アフリカ国内ではアパルトヘイト政権崩壊に向けて事態が進んでいました。

ボタ政権

ソウェト蜂起以後、南アフリカ国内ではゲリラ活動が激しくなります。国際世論の非難が高まりANCへの支援が強まったこと、ソウェト事件での亡命者によってゲリラ要員が大幅に増えたこと、モザンビークとアンゴラの独立でゲリラ活動の拠点が増えてきたことなどが要因でした。

外からは世界の経済制裁の波と「民族の槍」の破壊活動など国内外の様々な運動が強まるなか、78年9月、首相のピーター・ボタが登場します。

フォルスター政権失脚の後を受けて登場したボタは、「アパルトヘイト体制の手直し」のポーズを見せる一方、軍事体制を強めながら強攻策を打ち出して、少数派白人の体制死守をはかりました。

強まる世界の非難に対して、政府は84年に、前政権の導入できなかった白人・カラード・インド系からなる3人種体制を発足させます。狙いは、カラード・インド系とアフリカ人を分裂させることによって白人単独支配の安定をはかる分断支配でした。しかし、事態が政府の思惑通りに進まなかったのは、カラードとインド系の投票率の低さ（10%ほど）からも窺えます。80年に「背徳法」「異人種間結婚禁止法」を、八十六年には「パス法」などの法律を廃止しますが、すべてアパルトヘイト体制の根幹は変えずに見せかけの改革によって世論の非難をかわしながら、多数派を国政から締め出すことを優先させようとしたものです。

ボタは次々と懐柔策を繰り出す一方、白人権益を擁護し体制を死守するために、軍事予算を拡張しながら、警察国家から軍事国家への国家体制の脱皮をはかります。

81年末に南アフリカ軍は、激しくなる「民族の槍」の破壊活動への報復手段としてモザンビークの首都マプトのANC本部を襲撃しますが、ソ連・キューバなどの東側諸国への接近を懸念するアメリカ大統領ロナルド・レーガンは政府軍の襲撃に暗黙の了解を与えていたと言われます。この時からレーガン政権の「建設的関与」政策が始まりました。さらに白人政権は、ゲリラ活動を支援する周辺諸国に圧力をかけ、82年にはスワジランドと、84年にはモザンビークと不可侵条約を締結することに成功しています。

ボタ政権が人種「改革」を進めていた83年5月に、あらゆる人種、様々な団体が参加した南アフリカ史上最大の政治運動組織統一民主戦線（UDF）が結成されます。約六百の団体が参加したUDFの運動は、50年代の会議運動の再来であり、組織と数の力だけではなく、労働組合を中心にして大衆が動員されたために、白人政権の脅威となりました。

過去においても常にそうであったように、白人政権はUDFの弾圧を開始し、85年には指導者16名を逮捕して反逆罪で起訴しました。そして88年2月には、他16六団体とともにUDF自体を活動禁止処分にしてしまいます。

体制を支えたもの

理不尽なアパルトヘイト体制が半世紀以上にもわたって生き続けたのは、その体制によって多大な恩恵を受ける人々がいたからです。また、アフリカ人の抵抗という中からの突き上げにあっても、経済制裁という外からの締めつけを受けても、なりふり構わずに体制を死守しようとしたのは、搾取構造を維持することによって、南アフリカが生み出す豊かな富を、その人たちが独り占めに出来たからです。

体制内の白人の生活水準がいかに高かったかは、「遠い夜明け」や英国映画「ワー

ルド・アパート」などでも少し紹介されていますが、商用でヨハネスブルクを訪れた日本人のある記事を見てみましょう。

「500 坪（1650 平方メートル）の敷地に 10 メートルのプール、3 つの浴室のついた 120 坪（396 平方メートル）の建物、それにバーベキュー用の中庭がついている。読者は家賃はいくらだと思われるか。日本では手が出ないし見当がつかないと言われるだろう。

南アフリカ、ジョバーク（商業都市ヨハネスバークの現地名）でのお話である。場所は都心から車で 30 分の住宅地。月の家賃は日本円にして 5 万円である。このくらいで中級という。では高級の基準となると……最低でも 1000 坪（3300 平方メートル）はあるだろう……。

某日本商社の支店長宅に招かれた。白人高級住宅地の真ん中、敷地面積 2600 坪（8580 平方メートル）、4 面のテニスコート、15 メートルのプールと 6 台駐車できる車庫、建物は 250 坪（825 平方メートル）大木の植わったすばらしいこの庭園つきのこの豪邸が日本円で 2600 万円。では億の家はどのくらいの大きさか。たまたま、1 億 2000 万という家を尋ねた。敷地 1 万 2000 坪（396000 平方メートル）で、プールやテニスコート、それに建物、庭園は想像がつかぬだろう。また馬屋がついている。金持ちの条件には馬は欠かせないのかもしれないが欧米型だろうが、その馬を世話する人が 4 人は必要なので、その人たちの家、そして馬の運動場。なにしろ、日本の金持ちと規模を異にする。

（原文のまま）



その「豊かな白人社会」を内側からしっかりと支えていたのは、強力な警察力と軍事力です。84 年から 85 年の統計によれば、警察を含める軍事費は国家予算の 20% 近くに及んだといわれています。また、63 年、77 年に国連で決議された対南アフリカへの兵器輸出禁止措置に対抗して、白人政権は国内の軍需産業を発展させ、兵器類を自国で賄うことによって軍事力の強化をはかりました。その結果、軍需産業は重要な国内産業の一つとなり、82 年のアメリカ政府の統計によれば、その生産高は世界の第十位に達していたということです。兵器輸入国から輸出国へと脱皮した訳です。

さらに、75 年には核実験が行なわれたとも言われます。当時の政権は潜在的な核兵器保有国と見なされており、アフリカ人との最終的な対決の場面で追い詰められれば、核兵器が使用される可能性もあったとさえ考えられています。

しかし、いくら強力な力によって内側から支えられていると言っても、アフリカ人による屈強な内圧や経済制裁の外圧を白人政権が単独で受け止められる訳がありません。実は、外側からのもっと大きな力によって支えられていたのです。その力とは、

英国、フランス、西ドイツや米国、日本などの「工業先進国」で、強固な搾取構造を持つ内側の「豊かな白人社会」と協力して、貿易や産業投資によって莫大な利益を得ていたのです。その構図は、多国籍企業による「植民地」の様相を呈していました。南アフリカがアフリカ大陸に残る最後の「白い牙城」と言われた所以もそこにあります。

国連の経済制裁決議に反して、「工業先進国」が白人政権と貿易を止めないのは、豊かな鉱物資源、特にクロム、マンガン、モリブデン、バナジウムなどの希少金属から多くの利益を得ているからで、それらの希少金属は「先進国」の先端技術産業や軍需産業には不可欠なものだからです。日本のように鉱物資源の乏しい国では、より依存度が高くなり、その結果、貿易の関係もより親密になるというわけです。

各国が競って南アフリカに産業投資するのは、無尽蔵で、安価なアフリカ人の労働力を利用して莫大な利益が得られるからです。日本のように、国から直接投資を禁じられていても、現地法人を作って巧妙に法の網の目を潜ってまで経済を優先させたのは、その利益が大きかったからに他なりません。

経済的な要因ばかりではなく、政治的、軍事的な要素も見逃せません。西側諸国は南アフリカの社会主義化を恐れていました。アパルトヘイト体制の崩壊以上の問題とも考えられました。埋蔵量、生産高ともにアメリカに次いで二位を誇るウランをはじめ、豊かな鉱物資源を持つ南アフリカが社会主義国家になれば、当時の東西の力のバランスが崩れたでしょう。周辺国が社会主義路線を打ち出していたため、その懸念は大きく、レーガンが南アフリカに介入したのもそのためでした。

南アフリカは軍事戦略上でも重要な役割を担っていました。インド洋と大西洋を結ぶ喜望峰まわりの航路を西側諸国の商船が通過し、中東原油や戦略鉱物資源が多量に運ばれていたからです。白人政権はその戦略上の重要性を盾に、ナミビアの独立問題など様々な局面で西側諸国に難題を吹きかけました。

また、イスラエル、韓国、台湾、チリ、アルゼンチン、ブラジルなどとの関係も密にしています。それらの国との政治的、軍事的な協力関係も、体制を支える一つの力となりました。

アパルトヘイト体制は、内側からは経済力に裏打ちされた強力な警察力・軍事力で、外側からは経済的、政治的、軍事的な利益に与る西側諸国によって支えられていたのです。

マンデラの釈放

しかし、アパルトヘイト体制は崩壊しました。

ANCと白人政権が妥協点を見いだして、基本構造を変えないままの政権委譲を行なったからです。

キューバやソ連の支援を受けるANC、西側諸国の後押しを受ける白人政権、両者の全面戦争となれば、かつてのズールー戦争のように銃と槍の闘いとはいきません。湾岸戦争と同じ頃ですから、軍需産業界から在庫一掃を迫られて大統領ブッシュが起こ

した湾岸戦争のように、ミサイル交戦は避けられなかったでしょう。追いつめられれば、核すら使用される危険性も孕んでいたと言われます。全土が灰燼に帰す可能性が現実味を帯びていたのです。

マプトに本部を置いてゲリラ戦を展開していた ANC も、長引く闘争に疲れていました。87 年に来日した当時の ANC 議長オリバー・タンボは「27 年の逃亡生活、故郷のケープ州に帰りたと思わないか」と問われて「帰り……たくない。今は闘いの最中だ。闘いを続けることが私の仕事だから」と答えたと言われています。ラ・グーマのように亡命して国外で闘いながら、客死した人もたくさんいます。ANC 幹部のウィニー・マンデラが闘争資金を流用し、護衛隊に殺人を指示したとか、上層部の腐敗問題も表面化していました。

白人側も経済制裁による経済不況で孤立感を深めていました。元々アパルトヘイトは不経済な制度です。施設は「非白人」用、白人用の 2 種類を用意しなければなりませんし、有能なアフリカ人を熟練工として採用することも法律で禁じられ、無能でも全人口の僅か 10 数%しかいない白人を採用するしかなかったのです。堪り兼ねた経済界は、80 年代の初めには国外の ANC 幹部と解放後の展望について、話し合いを始めていたと言われます。

全面戦争を避け、ANC が政権を取り白人側が既得権益を守るためには、1 人 1 票制の「民主的な」選挙で改憲に必要な 3 分の 2 以上の得票は困るが過半数は得票が期待出来る「英雄」が必要で、それが獄中にあるマンデラだったわけです。

64 年以来ロベン島に幽閉されていたマンデラは、82 年にケープタウン郊外のボールズムア刑務所に移され、88 年には民間施設に移送されていました。

軍事体制を強めながら体制死守をはかったボタも、89 年には獄中のマンデラと会見し、声明を発表せざるを得ませんでした。ボタの辞任を受けて登場したフレデリック・デ・クラークには、マンデラの釈放しか道は残されていませんでした。

米国大統領ジョージ・ブッシュと英国首相マーガレット・サッチャーの合意を得て、マンデラは 90 年 2 月 12 日に釈放されます。

白人政権は、自らが作った法律を自らが破り、無条件でマンデラを釈放せざるを得なかったのです。

マンデラ政権

当然のことながら、91 年にはアパルトヘイト関連法が廃止され、94 年には全人種による総選挙が行なわれて、マンデラ政権が誕生しました。予定通り、ANC の得票は 62.6%、新聞には「ANC の得票、惜しくも 3 分の 2 に届かず」の見出しが踊りました。

第 1 副大統領に、オリバー・タンボの片腕だったタボ・ムベキ、住宅事業相に白人で唯一の ANC・共産党のメンバーだったジョー・スロボを起用するものの、国民党党首デ・クラークの第 2 副大統領就任、白人政権からの資金で「部族抗争」を演出して ANC を混乱させた張本人、ズルー人を率いるガッチャ・ブテレジを含めたインカタ自由党の 3 人の入閣を認めざるを得ませんでした。国民党は 20.4%、インカタ自由党

は 10.5%もの得票数を得ていたわけですから、当然の結果だったと言えるでしょう。

大統領施政演説では、マンデラはアフリカ人雇用や住宅建設など、貧困との戦いを強調しました。特に住宅建設に関しては、5年間で、新住宅 100 万戸の建設を打ち出しました。しかし、財源確保が叶うわけもなく、計画が破綻するのは目に見えていました。

2000 年オリンピック誘致問題では、マンデラが筆頭になって誘致運動を繰り広げたにも拘わらず、国際オリンピック委員会はアフリカ大陸初の開催を見送りました。メイン会場が予定されていたケープタウンの住宅事情や治安が、余りにも悪すぎたからです。そこには、ラ・グーマが『夜の彷徨』や『まして束ねし縄なれば』で描いたスラムが、変わらず存在していたのです。

マンデラの釈放は、悲願だったアパルトヘイト体制の終焉という名目を取ったアフリカ人側と、アフリカ人を搾取する経済構造を変えずに既得権益を守るという実質を取った白人側との妥協の産物であったわけです。経済基盤を持たずに主要な部門を白人に牛耳られて思うように政策を実行し得なかった他のアフリカ諸国と同じように、植民地支配から新植民地支配への移行を余儀なくされたのです。

厳しい見方をすれば、アフリカ人側は、安価な労働力として搾取され続けるという基本構造を変える最後の機会を失なったこととなります。当然の結果として、大多数のアフリカ人の生活が良くなることはなく、相変わらず貧しい暮らしを強いられ続けるというわけです。

2 エイズ治療薬

米国疾病予防センター（CDC）がエイズの本格的な調査に乗り出したのが 81 年、アフリカにエイズ患者が出始めたのが 84, 85 年ですから、瞬く間にエイズが広がったわけですが、どうしてこんなにも爆発的に感染が拡大したのでしょうか。

原因の一つは、エイズが性感染症だったからでしょう。一時世界を震撼させた旧ザイールのエボラ出血熱やインドの肺ペストなどの感染症は、致死率の高いものの潜伏期間も短かく、厳戒体制が敷かれるために、患者が回復するか、死亡するかすれば一応の終息をみますが、性感染症の場合はそうはいきません。HIV 感染症は感染しても無症状の期間が長く、その間、無意識に、ある場合は意識的に、2次感染が起こるからです。ウィルスの恐ろしさを知らなければ、当事者に意識されることもなく、性交渉を通じて病気は蔓延していきます。

ウィルス自体の感染力は極めて弱く、血液か精液による感染ですから、理論的には予防はそう難しくはないはずです。しかし、貧困や医療施設の貧しさ、病気に対する無知や偏見などが複雑に絡んで、実際には感染を爆発的に拡大させてきました。先に引用したジンバブエの報告記事でその辺りの事情を次のように報じています。

「ムランピングの売春婦は、顧客と寝るとき平均 10 ジンバブエドル (当時約 200

円)、約 80 ペンス、1 晩約 2 ポンドの料金を取ります。エイズ防止キャンペーンによって、売春婦の中には、顧客の多くにコンドームを使うのを納得させたという人もいます。しかし男性の間ではコンドームへの抵抗感が強く、特に 5 万人強のジンバブエ国軍の間ではコンドーム装着への抵抗は依然として強いと認めています。医療関係者は、国軍の HIV 感染率は少なくとも 50% と推計しています。スタンプスさんは、「兵士が若い女性の間でエイズを広げている」と公然と批判しています。ある医師は、処女とセックスすればエイズが治るという神話のせいで、北ハラレ郊外の高級住宅地マウントプレザント地区で一連の若い女性の強姦事件が起きていると言っています……」

出稼ぎ労働とジンバブエ

当時の 10 ジンバブエドルは 200 円前後で、僅かなお金のために、「売春婦」は鉱山や農場で働く出稼ぎ労働者のおこぼれにあずかっていたわけですが、その出稼ぎ労働者のコンパウンドが感染の温床になっているのも爆発感染の原因の一つだと思います。

既に述べましたが、入植者はアフリカ人から土地を奪って課税し、大量の安価な労働者を生み出しました。アフリカ人は税金を払うための現金収入を求めて村を離れ、鉱山や農場の賃金労働者か白人家庭の召使いとして、働かざるを得ませんでした。金やダイヤモンドなど、鉱物資源の豊かな南部アフリカでは、鉱山近くの粗末なコンパウンドに男ばかりが十数ヶ月を過ごすわけで、このコンパウンドがエイズ感染の温床となっているのです。鉱山労働者の実態を、鉱山労組書記長ラマフォサ氏は「ニュースステーション」の中で、次のように解説しています。

「この国では、ダイヤモンドと金の発見以来百年以上も、鉱山会社は安価な労働力を使って来ました。ずっと、アフリカ人労働者を使ってきました。会社は家族を十分に養っていけないほど安い賃金しか払わずに、ずっとアフリカ人労働者を搾取してきました。現在、白人労働者は、アフリカ人が稼ぐ 6 倍もの給料を稼いでいます。しかも、南アフリカの鉱山は世界一危険で、毎年 800 人もの犠牲者が出ています。家を離れ、鉱山にやって来なければならない労働者は、丸 1 年の間、家族とは会えません。白人は鉱山の近くで家族と暮らせますが、アフリカ人労働者は鉱山の近くで家族と暮らすことを法律上許されていません。年に 1 度、配偶者に会う場合でも、会えるのは僅か 2 週間にしか過ぎません。」

92 年にジンバブエで 2 ヶ月半の間、家族と暮らしましたが、そこでその出稼ぎ労働者の実態を目の当たりにしました。

在外研究員として通ったジンバブエ大学は首都ハラレの北、広い敷地に瀟洒な建物が並ぶ白人地域にありました。先の記事にも出てきた辺りです。滞在中に世話になった人からは「この国には一握りの貴族と大多数の貧乏人しかおらず、不動産事情は極めて悪い」と言われていましたが、運よくスイス人から月額 10 万円の家賃で家を借りることが出来ました。



敷地が 500 坪ほどで、「ガーデンボーイ」として雇われていたシヨナ人が小さな部屋に寝泊まりしていました。住み始めてからすぐに仲良しになり、名前がガリカーイ（通称ゲイリー）・モヨで、月給が 170 ジンバブエドル（約 4200 円）、1 年の大半を家族と離れて暮らしていると知りました。やがて冬休みに入り、ゲイリーの奥さんと 3 人の子供たちが来て一緒に暮らし始め、私の子供たちとも仲良しになりました。毎日庭でボールを蹴ったり、木登りをしたりして遊んでいましたが、蹴っていたバスケットボール一個の値段が、ゲイリーの 1 ヶ月の給料よりも高い 199 ドル（約 5000 円ほど）でした。

休みが終わって 2 人の子供たちが田舎に帰ったので、ゲイリーに頼んでハラレから車で 1 時間ほどの小学校に案内してもらいました。私たちは村始まって以来の外国人客だったそうで、全校あげての大歓迎を受けました。ゲイリーの家にも案内してもらいましたが、家には遥かに望む山裾までの広大な土地があるようでした。出稼ぎに行ける男は街に出て佻しい一人暮らし、残った女性が農作業と年寄りや子供の世話をする典型的な田舎の暮らしぶりでした。

豊かな自給自足の生活を送っていたゲイリーのお祖父さんたちは、突然侵入して来たヨーロッパ人によって、それまでの生活を奪われたわけです。



英国人入植者がハラレに来たのは 1880 年代の後半で、僅か 100 年余り前のことです。目的は金でした。ケープ植民地相セル・ローズは、現在のジョハネスバーグに次ぐ第 2 の金鉱脈を夢見て、私設の軍隊を送り込みます。豊かな鉱脈は見つかりませんでした。軍隊は立ち去らず、アフリカ人から土地と家畜を奪って居座り続けました。後に、大量の入植者が流れこむようになります。

入植者は 1920 年代に南アフリカとの合併を拒みますが、安価なアフリカ人労働力と豊かな鉱物資源などによって、南ローデシア（現ジンバブエ）は第 2 次大戦を境に一大工業国になっていました。その後、60 年代には、英国政府の意向を無視して独自の路線を歩みます。66 年には、ソ連と中国の支援を受けて独立闘争を始め、経済を欧米や日本に依存したまま、80 年に独立を果たして、現在に至っています。

ハラレで出会ったゲイリーもゲイリーのお父さんも、白人の貨幣経済の渦中に投げ

こまれ、現金収入を得るために村を離れることを余儀なくされた、典型的な安価なアフリカ人賃金労働者だったのです。

南アフリカからの入植者が自分たちの住み易いように作り変えたジンバブエは、かつては「南アフリカの第5州」と言われたようで、制度も街並もよく似通っています。ハラレでは、1年を通じて概ね北東から南西の方角に風が吹くようで、風上に水源地を確保して白人街を作り、工業地帯を緩衝地帯にして、南西にアフリカ人の居住区を造ったと言われます。大学の近くの白人街には大きな家が建ち並んでいました。実際、借りた家の隣には、夜間照明つきのテニスコートやプールもありましたし、庭には数匹の番犬が走り、たくさんのメイドやボーイが雇われていました。

65年に英国に対して一方的に独立を宣言して独自路線を取った白人政府は、アフリカ人の武力闘争や英国主導の経済制裁にあい、大多数のアフリカ人を無視しては国政を行えないことを悟ります。従って、南アフリカとは違ってジンバブエには、かなりのアフリカ人中産階級が生まれました。

在外研究の受け入れ先ジンバブエ大学英語科のトンプソン、クンビライ・ツォゾオさんもそんな一人でした。裕福で村の指導的な立場にあった家系に生まれたツォゾオさんがジンバブウェ大学（当時はローデシア大学と呼ばれていたそうです）に入学した68年頃の社会情勢は非常に緊迫し、人種差別政策も厳しく、白人地域に出入り出来るアフリカ人は、白人の下で使われる労働者に限られていたと言います。大学が白人地区にあったので、キャンパス内だけは特別な扱いを受けていたそうですが、近くの白人地区に足を踏み入れたとたんに警察に逮捕される仕組みになっていたようです。今では嘘のような話ですが、「当時、アフリカ人は、白人と肩を並べて歩道を歩けなかったよ」とも言っていました。

学生1500人のうち5分の1の300人がアフリカ人だったそうで、訪れた92年でも、学生総数は約1万人だと言われていましたから、ツォゾオさんも含めて、大学教育の機会を得た人はほんの一握りの選ばれた人たちであったのは確かです。

独立闘争で危険な目に遭いながらも活躍したツォゾオさんは、独立後ルーマニアと中国での視察と、アメリカでの留学を経験し、当時は英語科科長代行、訪問中には副学長補佐に昇進していました。小・中学校や大学向けの著書もたくさん書き、テレビ番組作りでも活躍中でした。大学では演劇指導や映像学のような科目を担当していました。

ある日「ヨシ、村をまわってエイズにかかった売春婦にインタビューをしてドキュメンタリーを作ったんだけど、見る？」と聞かれました。（外国では、ヨシと呼ばれます）当時、それほど気にも留めなかったのですが、既にジンバブエでは、エイズが大きな問題になりかけ、ゲイリーの村や、ツォゾオさんが取材した田舎では、まさに先の95年の報告記事にあった事態が展開されようとしていたのです。



「田舎の地域では、若い女性の数が激減することによって、未だかつてない規模での経済的、社会的な危機が引き起こされる可能性があります。その女性たちが農業生産や、老人や病人や子供の世話の大部分を担っているからです。」

さらに、すでに書きましたが、報告記事では、「たいていの女性にとって、HIV 感染の主な危険要因は、結婚していることである」という衝撃的な内容が紹介されています。また、当時のジンバブエの 55 歳の平均寿命（国自体の調査の信用性から考えれば、実際にはもう少し低かったと思われませんが）が 2010 年までには 40 歳以下に落ち込むだろうと予測していますが、すでに 40 歳のラインを割っています。そして、次の標的が南アフリカであることを以下のように書いています。

「医療関係者はエイズは二十年前に、ザイールやウガンダのような中央アフリカから輸送経路を通して、ケニア、ルワンダ、タンザニア、マラウイ、ジンバブエに南下し始めたとみています。優れた道路が整備され、出稼ぎ労働者の歴史と男性が性交渉の相手を複数持つ文化があるために、ジンバブエは特にエイズの影響を受け易い。次の標的は、南アフリカで、そこでは毎日 550 人の人々が感染していると推計する人もいます。」

その南アフリカでは、記事での予測通りに感染は拡大し、エイズ患者が急増していました。欧米では、従来の逆転写酵素阻害剤と新たに開発されたプロテアーゼ阻害剤を併用する多剤療法が劇的な成果をあげ、96 年が「エイズ治療元年」と呼ばれるようになっていましたが、特許料を含めた抗 HIV 薬は高価すぎて南アフリカでは、少数の金持ち以外には手がでませんでした。

エイズ患者が激増する事態に対処するために、南アフリカ政府は、97 年に「コンパルソリー・ライセンス」法を成立させます。

安価な供給を保証するために提案された同法の下では、国内の製薬会社は、特許使用の権利取得者に一定の特許料を払うだけで、より安価な薬を生産する免許が厚生大臣から与えられるというものです。（他国の製薬会社が安価な薬を提供できる場合は、それを自由に輸入することを許可するという条項も含まれていました）

99 年、米国の副大統領ゴアと通商代表部が、二国間援助の不履行をちらつかせて、共同議長である大統領タボ・ムベキに、その法律を改正するか破棄するように求めて話題になりました。

ゴアや欧米製薬会社は、開発者の利益を守るために設けられた特許権を侵害する南アフリカのやり方が、世界貿易機関（WTO）の貿易関連知的財産権協定（TRIP's）に違反すると主張しましたが、協定自体が、国家的な危機や特に緊急な場合には、コンパルソリー・ライセンスを認めており、当時のエイズの状況が「国家的な危機や特に緊急な場合」に当たるかどうか争点でした。製薬会社を大票田とする地域から選ばれていたゴアは、インフラが充分とは言えない南アフリカは予防を優先させるべきだ

と言い張る製薬会社の代弁者を演じて「心の冷たい製薬産業のおべっか使いだ」と集中砲火を浴びたわけです。

「アフリカ 21 世紀」でも明らかなように、仮に当時、南アフリカで抗 HIV 薬が「10 分の 1 の価格で輸入出来るように」なっていたとしても、現実には患者の手元に届くことはなかったわけですから、欧米の製薬会社は「知的財産所有権の保護」を楯に、コピー薬承認の時期を意図的に延ばしに延ばしていたということになります。

欧米の製薬会社と WTO の間で、交渉に尽力した世界保健機構 (WTO) のベラスカ医師は、命まで狙われています。99 年のシアトル会議の成果も反故にされ、2001 年 10 月の最終妥協案も、米国とスイスが拒否して成立しませんでした。会議を開催して合意はしても、約束を履行しないまま時間稼ぎをしていたのです。

『アフリカの瞳』の中に、そういった抗 HIV 薬と欧米の製薬会社をめぐる様々な経緯が、南アフリカ国内から見た視点で詳しく書かれています。

医師作田が、結婚したパメラやスラムの診療所の医師サミュエルや細菌学者のジュリアン・レフと協力して、ダーリー市で開かれたエイズ学会で、欧米の製薬会社の横暴と、その製薬会社と結託する政府の無策を告発したあとの次の一節です。

「こうした動きとは別に、フランスの〈ル・モンド〉が日曜版の特集で、製薬会社がエイズ治療薬の知的所有権をいかに主張してきたかを詳細に報道した。ひと月前のことだ。製薬会社はこの十数年、ひとつのエイズ治療薬の開発費が最低でも 3 億ドルから 10 億ドルにのぼるのを理由に、知的所有権を譲れないと強調し続けてきた。貧しい開発途上国が、価格の大幅値引きとコピー薬の製造あるいは輸入の許可を世界貿易機関に訴えても、毎回否決され続けた。今ではエイズ治療には多剤併用が中心なので、ひとりの患者が 1 年間に使う薬剤費は平均して 5000 ドルから 1000 万ドルだ。それは開発途上国の 1 人あたりの年収の 10 倍から 20 倍に相当する。つまり現在の薬価を 10 分の 1 に下げたところで、貧しい国の患者には手の届く額ではない。それなのに、世界貿易機関は去年の 8 月、いかにも大英断のような顔をして、コピー薬の製造認可と、正規薬の薬価の 10 分の 1 での輸入を認めた。しかしこれは全くの御為ごかしであり、貧しい国の患者の救済にはほど遠い。〈ル・モンド〉の記事内容を翻訳紹介した英字新聞を読んだとき、作田はこれまでの自分の主張がそのままそっくり認められたような気がした。ところが記事は、さらに 2 歩も 3 歩も踏み込んだ論調を繰り広げていたのだ。記者たちは、エイズ治療薬によって得た各社のこれまでの利益を細かく計算して、具体的な数字を出していた。それによれば、10 数年前に発売されたエイズ治療薬による収益は既に開発費の七、八倍に達し、開発途上国での価格を現在の 1000 分の 1 に下げても、充分採算がとれていた」。

製薬会社が時間稼ぎをして暴利を貪っていた絡繰りが手に取るようにわかります。作田は、安価な偽薬抗 HIV 薬 ヴィロディンを 5 年間も販売し続けた政府の無策を次のように締めくくります。

「これまで、欧米の製薬会社は知的所有権を楯にして、治療薬の価格を下げようとしませんでした。多くの HIV 感染者・エイズ患者が貧困の中であえいでいるのを知りながら、買えるものなら買ってみろと、高い治療薬を私たちの前でちらつかせる態度をとり続けてきました。ある国がたまりかねてコピー薬を作り、安く国民に配布しようとしたのにも反対し、世界貿易機関に訴えてやめさせる暴挙さえしました。これが破棄されたのは、世界の良識ある人々の抗議によるものです。昨年夏ようやく、発展途上国は特別割引価格で薬の提供を受けられるようになりました。しかしそれでも、価格はヴィロディンより高いのです。

私は人類の英知として、特定の国、つまり HIV 感染が蔓延している国では、治療薬を無料にすべきだと訴えたいのです。無料化の財源は世界規模で考えれば、どこかにあるはずです。戦争が仕掛けられ、数百億ドルの戦費がただ破壊のためだけに空しく費やされています。その何分の 1 かの費用を、エイズに対する戦いにあてれば、私たちは確実に勝てるのです。

この国の政府はヴィロディンに頼り過ぎて、まだ何ら効果的なエイズ対策を打ち出していません。コピー薬の製造が可能になって半年は経過するというのに、政府が製造を開始したという話もきかないし、輸入したという情報もありません。私たちが訴えるべきなのは、ヴィロディンの製造販売の即時中止と、本物のコピー薬の製造と輸入です。そして無料配布に向けて、私たちの声を全世界に高らかに響かせることです。これこそ、大統領が唱えるアフリカン・ルネッサンスの実現なのです」。